

さん ごう せん
3 号 線



中島卓偉

3号線

中島卓偉

3号線：それは幼かった自分たち兄弟と母親とを隔てる境界線でした。

いくどもその前で立ち尽くし、去ってゆく母親の後ろ姿をなすすべもなく、そこで見送りました。それは、絶対に越えられない一線でした。

3号線とは、福岡県の北九州市から鹿児島へ至る国道の名称です。ひっきりなしに車が行き交う幹線道路でした。



俺が3才の時、両親は離婚し、5才の兄貴と共に俺達兄弟は親父の元で育ちました。家から母親が突然いなくなり、家中を歩き回って母親を探すという行動が自分の人生の一番古い記憶です。

冷蔵庫の中、こたつの中、タンスの中、押し入れの中……、ありとあらゆる場所を探しながら、どこかに母親が隠れているんじゃないか、かくれんぼしてるんじゃないかと、最初は本気で思っていました。当時、親の離婚というものが、それが意味するものが、まだ何もわかりませんでした。

とにかく母親がいないという事実、それをどう受けとめたらいいのかわからず、来る日も来る日も玄関にすわって母親の帰りを待っていたことを覚えています。

玄関の横の壁にあるブレーカーにぶら下げてあった風鈴がか細く揺れるたびに、何故だか胸がしめつけられ、その寂し気な音を聞くのが本当に嫌でたまりませんでした。けれど毎日、ただそこにすわり、風が吹くたびカタカタと音をたてる玄関のガラスの引き戸をずっと眺めていました。

母親は専業主婦で就労していなかったため、離婚の際に親権を得ることができず、幼い息子二人を親父に渡す形になったと、のちに知りました。

幼い息子二人と引き離されることになった母親の心情は、母親にしかわからないけれど、それは想像しがたいほどの辛いものだったろうと思います。

泣きながら電話をかけてきたこともありましたが、何を言っても「ごめんね」と母親は謝るばかりでした。

「今、どこにいるの？」

「いつ帰ってくるの？」

と訊ねても、それには応えてくれずに、逆に

「お父さんとお母さんのどっちを選ぶ？」

と訊ねられ、兄貴も俺も口ごもるばかりで答えることはできませんでした。

そして、少しでも長く話そうものなら、有無を言わず親父に電話を切られました。

激しく玄関の戸をたたき

「息子達を返してください」

と母親が泣き叫んだこともありましたが、俺達兄弟の姿を見るなり、

「お母さんと一緒に暮らそう」

と俺と兄貴の腕をひっぱりました。

そんな母親に親父は何度も「出ていけ」と怒鳴りちらし、兄貴が何か言おうとすると「お前達はひっこんでろ」

と怒鳴りつけられ、俺達はただ、おびえて見ていることしかできませんでした。

親父はとても厳しい人で、口応えなどしようものなら、口より先に手が出るような人でした。

一度、兄貴と二人でこっぴどく怒られて、俺は兄貴に訊ねたことがあります。

「父ちゃんは、なんでこげん厳しいとかいな？」

と。その時兄貴は言いました。

「父ちゃんは前は優しくかった。母ちゃんがおらんことになってから父ちゃんは変わったんよ」と。

それが何を意味しているのか、当時の幼い自分には理解ができませんでしたが、今思うに親父は、息子二人を自分が育てていくと決意して、片親だったから子供が曲がったというようなことになるまいと、厳しく育てたのだと思います。

本当に、厳しい人でした。

でも親父は、忙しい毎日を送りながらも俺達に寂しい思いをさせまいと、最大限の努力をしてくれたと思います。

休みの日には必ず車でどこかに連れていってくれたし、家では常にレコードをかけて、何かしらの音楽が鳴っていました。ジャズ、ブラック・ミュージック、リズム&ブルース、クラシック、その中にビートルズがありました。家の中がシーンとしてしまわないように、何をしても親父はレコードをかけていたように思います。音が止まると、親父はいつも兄貴に

「レコード、ひっくり返せ」

と口グセのように言っていました。

ビートルズを俺達兄弟が片言で歌うようになったことで、誕生日やクリスマスには必ずビートルズのレコードを親父は買ってくれました。

母親は時折、俺達兄弟に会いに来ましたが、家に上がることはなく、3人は外で短い立ち話をするだけでした。その後は、家から一番近いバス停からバスに乗るか、3号線を越えて駅まで歩くかのどちらかでしたが、俺達兄弟は母親と手をつないで歩き、帰っていく母親を見送るとい日々がくり返されました。

が、それはいつも、3号線まで、でした。

俺達兄弟が幼少期をすごした古賀市（当時は古賀町）のどまん中を3号線は走っていて、住んでいた家や通った小学校は3号線より内側に、母親が利用する古賀駅は3号線の外側にありました。3号線は車の通りがとても激しかったので、学校や町内会などの呼びかけで「3号線は危ないから渡らないように」といった注意を、俺達が住んでいる区域内の子供達はみんな受けていて、当然ながら親父からも「3号線は渡るな」と厳しく言いわたされていました。

なので、帰ってゆく母親を古賀駅方面に歩いて見送る時も、母親がバスで帰る時も、俺達兄弟は3号線までしか送っていくことができませんでした。

「今から母ちゃん、送ってくるけん」

と親父に言うのと、いつもきままって親父は俺達にこう告げました。

「3号線までだぞ」

いつまでも手を振る母親を乗せたバスを、ひたすら走って追いかけてながらも、バスが3号線にたどりつくのと、たとえ信号が青であっても俺達兄弟は3号線を渡ることができませんでした。

「なんで、いつも、すぐ帰ると?」

「なんで、一緒におれんと?」

幼かった自分には、この状況が理解できず、母親の涙の訳も解らず、3号線を越えて夕暮れに消えてゆく母親の背中をいつもただ見つめることしかできませんでした。

ある時、兄貴にこう言ったことがあります。

「兄ちゃん、青なんやけん渡ろうや」と。

親父の言いつけに忠実だった兄貴は、それでもこう言いました。

「絶対、渡ったらいかん」と。

「帰ろう」と。

「しょうがないけん」。

そう俺に強く告げました。いつも、何度も、結局二人で3号線の前に立ち尽くしました。それくらい当時の自分達にとって、3号線という国道は母親との絶対的な境界線だったのです。

母親はいつ会いに来てくれるかわからなかったもので、川べりを走るバスを見かけるたびに、もしかしたら母親が乗っているんじゃないかと思って、何度も追いかけてたりしました。母親が乗っていないことが何となくわかって、乗っていたと信じたくて、バスを走って追いかけてました。

予告なしで会いにくる母親とは、すれ違うこともありました。

夕方に学校から帰ると、兄貴の自転車のカゴに母親からの置き手紙やバスケットなどが入っていて、「ああ今日は会えなかった」と悔しい思いを何度もしました。親父が早く帰ってきてしまうと、それをすべて取りあげられてしまうので、学校から走って家に帰ってきて、母親からの置きみやげを見つけた時は、こっそり引き出しに隠してから遊びにでかけました。

母親は別れ際にいつもお菓子をくれました。それはチョコレートだったり、クッキーだったりして、普段めつたに食べられないような、親父が絶対に買ってくれないような上等なお菓子でした。でも、それを家に持ち帰ると親父にすべて捨てられてしまうので

「今のうちに全部食べれ。持って帰っても怒られるだけやぞ」と、兄貴はいつも俺に言いました。

でも、全部食べてしまうと、もう母親に会えなくなるような気がして、いつも少しだけ食べては残りをポケットに忍ばせて、家に帰るとすぐ自分の机の引き出しの奥にずっとしまっておきました。

毎日そのお菓子が食べたくて食べたくて仕方なかったけれど、母親に会えなくなると思うと、やはり食べることはできず、俺はいつもお菓子をしまいこんでいました。

そして、次に母親と会った時にもらったお菓子と引き換えに、前のを食べようと引き出しから出してみると、案の定カビがはえていて、結局もらったお菓子はいつも食べることができませんでした。

少しずつ、大人になるたび、兄貴と俺は子供ながらに

「母ちゃんを悲しませたらいかん」「男やったら、こげなことで泣いたらつまらん」……

そんな意思疎通が互いにはたらき、いつも別れ際は明るい話を母親に報告していたような気がします。

二人ともマラソン大会で1位になったこと。

二人とも剣道をがんばっていること。

勉強ができた兄貴はテストで100点をとったことを。

俺はサッカーボールでリフティングが100回できるようになったことを。

母親の笑顔が見たくて、母親に泣いてほしくなくて、いつも兄貴と二人、精いっぱい明るく振るまわったつもりでいました。会える時間があまりにも短く、あまりにも無力だった俺達兄弟は、いつ母親が来ても会えるように近所のバス停の前でバスを待ち続けたこともありました。田舎のバスなので、1時間に1本の割合くらいでしかバスは来ず、最終であっても18時台後半だったように思います。兄貴は時刻表を丸暗記しました。家においても

「今、ちょうど最終やねえ」

と、つぶやきながら勉強していた兄貴を覚えています。

一度、親父の車が故障して、朝、バスで仕事に行かなくてはならなくなった親父が「時刻表、見てこい」と兄貴に言ったことがありました。その場ですんなり兄貴が答えたことにびっくりした親父は、すぐさま兄貴をほめました

「違うよ、父ちゃん。兄ちゃんはいつ母ちゃんが会いに来てくれてもいいように時刻表を覚えてたんだよ」と俺は内心、思いました。が、そのことを親父に告げることなど到底できませんでした。

大人になってから古賀を訪れる機会があり、3号線に立ってみると、もちろん今でも車の往来が激しい道路ではあるのですが、子供のころに見ていた3号線の方がとてつもなく大きい道路に感じているように思いました。

信号は青なのに渡れなかったこと。

かたくなに「越えたらいけん」と兄貴が俺に言っていたこと。

それらは、俺達二人にとって親父の言葉が絶対的なものであったことを意味し、いかに親父が俺達に厳しかったかということに改めて実感させました。

あのころ、3号線を越えるにはどうしたらいいのか、いつも兄貴と話していました。

いつか大人になって、この3号線を越えることができたらいつでも母親に会いに行けるのになど、いつもいつもそんな話を二人でしていました。

今でも3号線を越えて、田んぼのあぜ道を駅の方に向かって歩いて行く母親の後ろ姿を、そして母親を乗せて走ってゆくバスが夕暮れに消えてゆく場面を、きのうのこのように思い出すことができます。

3号線の前に立ち尽くしたまま、どうすることもできなくて、ただ手を振ることしかできなくて、涙をこらえられない俺に兄貴は言いました。

「あのトラックのナンバープレート見てみい、口が3つに川って書いてとろろが。あれで品川って読むんぞ。あげん書いとう車はぜんぶ東京から走って来よるんぞ。すごかろう！」

そう言って兄貴は俺を元気づけてくれました。でもバスが行った後、母親が見えなくなった後、俺に背を向けて涙をふいていた兄貴を、弟の俺は知っていました。俺には絶対に見せませんでした。兄貴はいつも遠くを見ながら、声を殺して泣いていたように見えました。

去年初めて車を買、納車された品川ナンバーの自分の車を見た瞬間、あの日、元気づけてくれた兄貴の言葉を思い出しました。

夕暮れ時を走るフロントガラスに、とてもきれいな夕日が映りました。それはあの日、3号線から見えていた夕日によく似ていました。あまりにもまぶしくてサングラスをかけたけれど、いつまでも目の前がかすんで見えないのです。気づかないうちに自分は泣いていました。

「男だったら泣いたりするな」

と、親父や兄貴に言われた言葉が、そしてあの日励ましてくれた兄貴の声が、今にも聞こえてくるようでしたが、フラッシュバックした夕暮れの中ハンドルを握ったまま、自分は涙をこらえることができませんでした。



兄貴はとても強い人でした。

自分はいつも泣き虫でした。

親父は兄貴や俺と酒を交わすことなく、この世を去りました。

そして母親はひとり、福岡で年をとりました。

人は辛かったことや悲しかったこと、忘れてしまいたいことは知らず知らずのうちに記憶の底に封印してしまうと何かの本で読んだことがあります。それは前を向いて生きてゆくための自己防衛本能のようなもので、それがつまり、生きる力というものなのかもしれません。

古賀ですごしたあのころの日々は、決して辛かったことばかりではありません。楽しかった思い出も、もちろんたくさんあります。けれど幼かった自分にとって、母親との別れ、母親の不在はどうすることもできなかったもどかしさと共に、切なかつた記憶以外の何者でもなかつた。

自分はずっと、あのころの日々を思い出すまいとしていたのかもしれない。

けれど、ある時ふと、3号線のことを思い出し、同時に閉じこめていたすべての記憶が甦りました。かつての自分なら、すぐさまそれらを消し去ろうとしただろうし、その傷のようなものを他人に悟られまいとしたでしょう。

でも今、30代に入って、その思い出は懐かしいものとなり、あの頃の日々にいとおしささえ覚えます。

あのころのすべてを、自分は許せたのだと思います。

そして、許すことができた瞬間、3号線という歌が生まれました。

You Tube
Broadcast Yourself™



▶ PVを見る

3号線

平成23年10月21日発行

著者 中島卓偉

協力 小松明美

編集 アップフロントエージェンシー